
神々の賽　　～対の女神～

トワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の賽 〱 対の女神 〱

【Nコード】

N1249W

【作者名】

トワ

【あらすじ】

列強ひしめく大陸の中でも、最大最強を誇るレナーテ王国。そこにはかつて『シャンキルの女神』と謳われた美貌の王女がいた。その王女を母に持つ、フィアナとアルティナ。双子の姉妹は、母と同じ予言をあたえられたことから、人目から隠されていた。年頃になった彼女たちを待ち受ける、運命と恋——のお話です。

プロローグ

「殺してしましましょう」

まるで野花でも摘みに行くような軽やかさで、男はいった。

室内が一気に緊張する。

それまで、空気の重さに耐えかねてか、感情を晒すことを恐れてか、あるいはその両方か——瞼を閉じていた男たちは、殴られでもしたように一斉に目を開けた。その色がそれぞれ異なるように、男たちの瞳はそれぞれの感情をのせている。ただ、向かう先は同じだった。

怒り、驚き、不安といった負の感情を一身に集めた男は、萎縮するどころか逆に、それを待っていたようだった。

「さすれば、憂いは消えまする」

男の声は穏やかだった。

しかしその発言は、穏やかならぬ空気を呼んだ。

「ほう、たいしたものだ。災いになるやもしれんというだけで、まだ目も開いておらぬ赤子を殺すか」

侮蔑を含んだ声でそういった男は、目に怒気と殺気をみなぎらせていた。

戦場でしか見られない男のその気配に、あるものは臆し、あるものは不安の色を見せているというのに、射殺するような目に見据えられても、対する男はまったく動じなかった。

「さようです。確かに、災いになるかならないか、いまはわかりません。ならなければ結構。ですが、なったとき、どうなさいますか？ われらはすでにそれを経験しております」

怒気を隠さぬ男が、苦い事実を聞かされて眉間に皺を寄せる。

「それに……生きたとしても、お幸せにはなれません」

「なぜ、そういい切れる」

「たとえ災いにならずとも、災いになるかもしれないというだけで、われらが国と民には不安が付きまとうことでしょう。その存在が、忌まれ遠ざけられるは必至。災いになればそれこそ、あのとき殺しておけばよかったと思われるのです。どちらにしても、お気の毒ではありませんか？」

「それが殺す理由になると思うのか？」

「十分かと……」

平然といい放つ男に、眉間に深い皺を刻んだ男は、抑えた声で訊ねた。

「百歩譲って受け容れたとして。……誰が手を下すんだ？ 俺か？ それとも何も知らない奴にやらせるか？ 誰が、赤子殺しの罪を背負うんだ？」

「お許しができれば、わたくしが……」

「貴様、正気か？」

「無論」

「ひとではないな。ひとの成りをしているが、貴様はひとではない」

「これは……国の未来を背負って立つお方の言葉とは思えませんな」

それまで、春風のように穏やかだった男の声はいま、濃い嘲りを含んでいた。

「ひとであることに固執して、成すべきことを拒否なさる、か。ご自身は守れても、国は守れんでしょうな」

「黙れ！ このくそがきが！」

それを聞いた男は、もはや怒りを抑えることを止めたようだった。怒声とともに、椅子を後ろへ蹴り倒す。

全身から怒りを放出させた男は、大またで男に歩み寄ると、その胸倉を掴んだ。

「阿呆がわかった風な口を利くんじゃねえよ！ 罪もねえ子供を殺して国が助かるか？ どの面下げてお前は自分の子供に会うんだ？ 赤ん坊を殺した手で、ガキの頭を撫でんのか？ 神の前でなんていうんだ？ すべては国のためでした、とでもいう気か？ そんな薄汚い野郎がのさばる国を、神々が祝福すると思うか？ そう思ってんならお前は馬鹿だ。とんでもない大馬鹿だ。いいか？ お前は国を守るんじゃない、滅ぼそうとしてるんだよ。お前みたいな野郎が国を腐らせてくんだよ。つまんねえ占いだか予言だかに振り回されやがって——」

「やめよ」

鋭い叱咤の声が、激情に染まる空気を切り裂いた。

男が、怒りで底光りする目を、横槍を入れた相手に向ける。

穿つような視線を向けられた相手は、怯むどころか逆に、鋭い目で男を睨み返した。

「やめよ。陛下の御前である。そのくらいにしておけ」

いわれた男は「ちっ」と舌打ちし、胸倉から手を離した。

室内は、ようやく静けさを取り戻した。が、緊張は増すばかりだ

った。

諍いをとめた男が、意識と視線を横に滑らせる。そこには、男が忠誠を誓い、唯一膝を折る人物が座っている。逞しい体躯に、獅子のたてがみを思わせる頭髪。王者と呼ぶにふさわしい威厳と風格を備えた主はいま、何者をも従わせる紫の瞳を隠していた。

「陛下……」

重々しい声で男はいった。

すべての視線が主に集中する。しかし、主は微動だにしない。

「……ご決断を」

促す男の声に、主はようやく反応した。

固く閉じられていた瞼が開く。

主の瞳が示すのはどちらなのか――

男たちがそれを確かめる前に、言が落とされた。それは短く、抗えない強さでもって、男たちの前に放たれた。

プロローグ（後書き）

よろしく願います。

1 日常

「まったく、お前は——気が小さいにもほどがあります。やられたらやり返すくらいの気概を持ちなさい。これだけ立派な体をしていて、いったい何を恐れるというのです」

若い女は憤りを隠さず、身の丈を越す相手を叱りつけていた。優しい風貌をしているが、白い肌には薄く朱がさし、淡い緑の瞳にきらきらと、怒りと陽光を反射させている。

「オーカー、聞ってるの？」

「……」

感情あらわな瞳をひたと向けられている相手は、黒曜石のようなつぶらな瞳を彼女から逸らすばかりだった。

□

□

□

□

□

「まあ、いまに始まったことではありませんが……」

その様子を遠目から見ていたサラは、ため息とともに口にした。

「馬を相手に説教とは、わが姉ながら――」

「尊敬する？」

サラは横を向き、言葉を継いだ人物に目を移した。それまで人馬のやりとりを見ていた紫水晶のような瞳が、いたずらな光をたたえたまま、サラに向いていた。サラは目線をわずかに下げ、微笑んだ。つややかでゆるく波打つ黒髪が、敷布の上に広がっている。彼女の主は、片腕を枕に寝転んでいた。

「フィアナ様、少々違います。見上げたもの、とでもいいましょうか。無駄を承知であるようなこと、わたしにはとうてい真似できません。まあ、真似たいとも思いませんが……」

呆れるような、諦めたようなサラの声に、

「ふふっ」

という笑い声が重なった。

「アルティナ様？」

サラはいまひとりの主、アルティナを見た。寝転ぶフィアナのすぐ傍らで、片膝を立てて座っている。双子の姉フィアナとは対照的な、まばゆいばかりの金髪が、その背中で揺れていた。

「ティア？」

フィアナが双子の妹に紫の瞳を向ける。

アルティナが応えるように、深緑の瞳を合わせた。

「心配だわ。オルガったら、そのうち壁や柱にまでお説教するようになるんじゃないかしら？」

露ほどの不安もない声でアルティナがそう言うと、三人は一緒に笑った。

「まあ、その心配は先に置いておくとして――」

フィアナが笑顔のまま、視線を人馬に向ける。

「そうね、オルガの気持ちもわかるけど、あれでは逆効果ね」

アルティナが頷くと同時に、フィアナは立ち上がった。

「オルガ！ お説教はそれくらいにして、こっちにいらっしやい！」

□ □ □ □ □

「オーカーときたら、本当に歯がゆくて仕方ありません。素晴らしい脚と体に恵まれているというのに、あの臆病さゆえ、すべて持ち腐れます」

オルガは悔しさを滲ませる。

一方、お説教から解放された馬はいま、緑豊かな広大な敷地を駆け回っていた。気ままに緩急をつけ、あたりを走り回るさまは、力強く優雅であった。

「さすが、シスタ産の名馬ですわね」

サラが感心したように声を上げる。

「そうね。ああして走り回っていると、スレイプニルとグレイプニルとそう変わらないわね。ちょっと神経質で、ずいぶん臆病なだけでしょ？」

と笑いかける黒髪の主を、オルガは恨めしげに睨んだ。

「それが大層厄介なのでございます。人見知りをする、知らない人間を怖がる、果ては犬まで怖がる始末。これでは使い物になりませんでしょう？」

「どうして？　オルガには慣れているし、ちゃんと乗せてくれるじゃないの。わたしなんか近づく、いまでも目を逸らされるわよねえ？　ティア」

「そうよ、オルガ。それに、初めて来たときのことを思えば、格段の進歩だわ。ゆっくり色々なことを覚えさせればいいわ」

アルティナの言葉に、サラが思い出したように笑った。

「あれは貴重な体験でしたわ。失神しそうになった馬、というのを初めて見ました。いきなり脚から崩れてゆくので、毒でも盛られたのかと心配しましたけど……それが緊張からだとは、思いもしませんでしたわ」

「皆そうよ」

その後の喧騒を思い出したのか、フィアナが微笑んだ。

「ほんと、あのときから比べれば大した進歩だわ。オルガ、慣れよ、慣れ。時間をかけて、あらゆることに慣れさせていくしかないわ。頑張りなさい」

「フィアナ様もアルティナ様も、他人事だと思って――」

『だって、オーカーはオルガの馬でしょう？』

双子の主はくるりと瞳を輝かせ、同音同句にそういった。

「使い物になるのにいったいどれくらい時間がかかるのか、考えるのも空しいですわ」

憂鬱そうにいうオルガは、次の瞬間、はたと気付いたように顔を上げた。

「だいたい、わたしの仕事はおふたりのお世話であって、馬の世話ではありません」

「お小さい頃ならそうでしょうけど、早や、十七になられたフィアナ様とアルティナ様は、もう手もかからないでしょう？」

「何をいつてるの！」

オルガは妹をきつと睨みつけ、次いでふたりの主に目を向けた。じつくりと見つめ、眉間に皺を寄せてから、おもむろに口を開いた。

「フィアナ様！ なんですか、その格好は。アルティナ様もです！ 男のように片足を立てて座るなど、市井の娘でもそのような恥ずかしい格好はいたしませんよ。そろいもそろってまあ。王族の令嬢がそのようにはしたなく、だらしない姿を晒してはなりません」

にわかに自分の仕事を思い出したオルガは、馬に向かうときよりさらに厳しくふたりの主を戒めた。

「ここにはだれも入ってこれないから大丈夫よ」などというものなら、「内での習いが外に出るのです。いったい何度いえばわかるのです」と返ってくるのは間違いない。聞くこと数千回を下らないこの言葉を避けるため、ふたりはおとなしく従った。

居ずまいを正す主たちを見届けると、オルガはその矛先を妹に向けた。

「サラ、お前もお前です。己の務めを果たさなければ駄目でしょう――」

フィアナとアルティナは顔を見合わせ、おどけるように肩をすくめた。

「よろしいですか、緊張感をお持ち下さい——」
常に、どこかに、人の目があり、耳があるとお願いください——

いつものように、説教のくくりの文句に差し掛かったときだった。
オルガが突然立ち上がり、森に向かって怒鳴りつけた。

「ダブル！ お前は何を食べているの！」

いいながら、急ぎ足で森の中へ入ってゆく。

「まあ……いいところだというのに、姉さんも忙しいこと」

サラは気の毒そうにその後姿を見送り、フィアナとアルティナは
身を乗り出し、木陰に見え隠れする人馬を探した。

□ □ □ □ □

馬は、ところどころに大きな白い花をつけた、濃い緑の葉を繁らせる木に顔を突っ込んでいた。熱心になにやら食^はんでいたが、ピクリと耳をふるわせたかと思うと、繁みから顔を引き抜いた。そしてオルガを見つけるなり、彼女に突進してきた。

それは一見、襲われるのではないか――と知らぬものに誤解を抱かせる勢いであったが、馬は脚力の強さを見せつけるように急停止すると、オルガの顔に自分の長い顔をこすり付けた。

オルガはよろめいたものの、踏ん張りながら、人懐こい葦毛の馬の首を撫でてやった。それから、長い顔を自分に向けさせ、しかめ面を作った。

「こら。なんでもかんでも目に付くものを食べてはいけませんといってるでしょう？ 毒でもあつたらどうするの？」

馬は白い花を食^はんでいたのだった。

□

□

□

□

□

「お前はほんとうによく食べるわね」

アルティナはその食欲を感心しながら、三つ目のりんごを頬張るダブルルの背を撫でた。

葦毛の馬は、大好きなりんごをもらった上、撫でられて大層ご満悦の様子である。

「なんでもかんでも食べすぎです」

オルガは苦い顔をする。

「十分に餌を与えているというのに、他の馬の餌を横取りする、人にはねだる、外へ出れば目に付くものを食べるなど――まったく、その食い意地をなんとかなさい。そのうち毒にあたって死んでしまわよ」

心配からくるオルガの説教を、ダブルルは聞いているのかいないのか――。

栄養たっぷり、他の馬に比べてふた周りほど立派に育った馬は、『もう一個、もう一個』と太い首を使って、アルティナにねだっていた。

「そんなに食べたらお腹をこわしますよ！」

おねだりが成功したダブルを見て、オルガは声を張り上げた。

「アルティナ様も、そう簡単にお与えにならないでください」

「ごめんなさい。でもダブルには勝てないわ」

ダブルには、巨体に似合わぬ可愛さと、人懐っこさ、という強力な武器があった。

だがオルガにいわせると、その武器も表現が変わる。

「ダブルの図々しさの五分の一でもいいですから、オーカーに分けてやれませんかしら？」

「それは無理というものよ、姉さん」

間髪をいれずに答えたサラは、オルガに睨まれた。
フィアナが笑った。

「お前も心配が絶えないわね、オルガ」

「まったくですわ。そもそもこの二頭は、フィアナ様とアルティナ様に献上されたというのに、どうしてわたくしが面倒をみなければいけないの？」

フィアナとアルティナは、『何をいまさら?』という顔をオルガに向けた。答えたのはサラだった。

「フィアナ様にはスレイプニル、アルティナ様にはグレイプニルと、ご乗馬がおありですもの。他のものも乗馬は決まっていますし、エマシやラリサには、オーカーとダブルはまだ扱いきれないでしょう? なんといいっても癖が強すぎますから」

そんなことは百も承知だった。ただ、愚痴ることと発散させたかっただけなのだが、オルガは、続くサラの言葉で渋面をつくることになった。

「それに、親の尻拭いは、子がしませんとね?」

□ □ □ □

どこでどう探してくるのかわからないが、オルガとサラの父は、とんでもない馬を見つけてきては、娘の主たちに献上するのだった。

並みの馬では、彼女たちの主には物足りないだろう――

という、まったくもって余計なお世話を、言に違えず実行している。扱いにくく、一癖も二癖もある馬を連れてくるのだ。しかも騎乗困難な名馬であることが多く、そのことがオルガとサラを悩ませていた。

主や同僚たちの乗馬にするには、あまりに危険である。野に放つことも考えたが、名馬ゆえそれも惜しく、なにより、ひとに危害を与えるだろうそちらの不安の方が大きかった。

結局、主たちの住まいが、豊かな森を抱えるかつて王家の狩猟場であったため、その広大な敷地で放し飼いにすることにした。ところが、結果は思いもよらないことになる。手に負えない危険な馬の一、二を争う二頭が、ふたりの主、フィアナとアルティナに乗馬となってしまった。

「とんでもない！」

オルガを筆頭に、多くのものが口をそろえて反対したが、

「だって、しょうがないでしょう？ 乗れというのだもの……」

フィアナとアルティナ、乗り手の意思ではなく、それは馬の意思だった。

ひとの一人や二人は蹴り殺していそうな、見るからに癩気の強い

獯猛なスレイプニルと、傲岸さを内に隠し、思わぬところで獯猛の牙を剥くグレイプニルの二頭の馬は、こともあろうに彼女たちの大事な主を乗り手に選んだのだった。

これで、主の命令に従うならまだ可愛げもあるが、乗っても指示は聞かず、しかも気が向いたときにしか主を乗せない。というだけでは飽き足らず、主が他の馬に乗ることを許さなかった。人と馬の主従関係を逆転させるという、まさにとんでもない二頭だった。

オルガは主から二頭を取り上げたかったが、齒を剥き、前肢を上げて威嚇してくるスレイプニルなど、近づくこともままならない。

『フィアナ様とアルティナ様に傷をつけようものなら、我が身と引き換えにしても必ず始末する』

と、オルガは心ひそかに固く決意したものである。
その決意のほどが相手に伝わったのか、オルガと、この二頭の馬の関係は最悪だった。

スレイプニルとグレイプニル、それだけでもう十分であるのに、ぼつぼつとではあるが、いまだ馬を連れてくる父に、オルガは怒りさえ覚えていた。これ以上、主や同僚の手を煩わせることはできない。オルガとサラで面倒をみるしかなかった。

□ □ □ □ □

「まったく、とんでもない馬ばかりよこして。何を考えているのかしら？」

「何も考えてないんじゃない？ 父さんは」

「あー、何か粗相でもして、お役を取り上げてもらえないかしら？」

遠い空を見上げてオルガがいうと、サラも倣うように顔を上げた。

「それくらいで止めるんじゃないでしょう？ 大病にかかるか、刺されでもすれば別でしょうけど」

「そうねえ……」

と、相槌をうちかけたオルガは、勢い首を横に振った。

「ああっ、駄目駄目、いまは駄目よ」

「ああ、そうでしたわね」

「使者としての務めを果たしてもらってからでないと――」

「お前たち、いい加減にしてちょうだい」

遠い空を見やっただまま交わされる、侍女姉妹のひどい会話に、たまらず、といった様子でフィアナとアルティナが噴きだした。

「親のことをそんな風にいうなんて。ほんとうに何かあったらどうするの？」

「何かあれば、心配もしましょうが……」

父の姿を思い浮かべているのか、オルガの顔は渋い。

「さようです。われらの父は、死神にも見放されておりますゆえ、多少呪^{まじない}をかけたところでビクともしませんわ」

「大事な娘に面倒を押し付けているのですから、これくらいいいわなければ割に合いません。天上の神々もお許しくださいます」

サラは平然と、オルガは自信たっぷりにいい切った。

「まったく、お前たちは」

諫めることを諦めたフィアナとアルティナは、苦笑いを空に向け

た。

オルガとサラも、同じ空の先を見上げる。澄みわたった空の彼方。その下に、彼女たちの父がいる。

「――そろそろ着く頃かしら？」

「そうね、シャンキルを出て十日だから、もう着いてるかもしれないわね」

オルガは答えると、黙ったまま彼方を見つめる主たちに問うた。

「ご心配ですか？」

オルガは、主たちの心の中にあるものを知っている。サラも当然知っていた。

「ご心配は無用です。グレン様は吉報を携えてお戻りになります」

そうかしら？ と深緑の瞳が揺れるのを見て、サラは続けた。

「われらの師がそう決めたのです。覆ることがあると思いますか？」

サラのその言葉に、主たちは微笑んだ。

「おふたりは心配などなさらず、ただお待ちになるだけでよいのです」

「さようです。ただし——いい子にしていただかないと、お話は返してしまひましてよ」

幼子を脅すようにいうオルガに、フィアナとアルティナは破顔した。

『もちろん、いい子にしてるわ』

「大変結構です。では、そろそろ屋敷に戻りましょうか」

「ええっ、もう？」

「なんです？ いい子にしてくださいるのではなかったのですか？」

『あら、わたしたちはいつもいい子にしていってよ？』

「いい子であれば、侍女の手を煩わせず、素直にお聞き容れくださるはず。だいたい、目を離すとたちまち姿をくらまして、侍女に心配をかけるなど、とてもいい子とは思えません。まだまだにございます」

「オルガは下げさねえ。そんなこと、たまにしかないじゃないの」

「そうよ。この間のは不可抗力だったし」

「ねえ？ それに、オーカーやダブルに比べたら、わたしたちはずいぶんとましでしょう？」

「馬と比べてどうなさいます！」

サラは、長くなりそうな主たちの会話を尻目に、ひとり後片付けに取り掛かった。

1 日常（後書き）

王道恋愛めざしてます。遅筆なため、更新は……遅いことだけは請け合いです。

ああ、書くのって難しい、と実感する日々です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1249w/>

神々の賽 ～対の女神～

2011年12月2日21時53分発行